

地域から期待される森林環境教育等を目指して！

常呂川森林環境保全ふれあいセンター
栄 平男

1 はじめに

常呂川森林環境保全ふれあいセンター(以下、「ふれあいセンター」と言う。)が平成19年度から平成22年度まで森林環境教育等に取り組んできた経過から、地域から期待される森林環境教育等を目指すための今後の方向性について発表します。

2 地域からの期待

(1) 花の名前

突然ですが、皆さんに質問あります。

右の写真に表示されている花々の名前が分かるでしょうか。

上からハクウンボク、
ベニバナヤマシャクヤク、
ゴゼンタチバナです。



私が平成19年にふれあいセンターに着任したときは、これらの花の名前は分かりませんでした。それまでは、樹木や森林を見ても木材資源としか見ていなかったことと、そもそも植物などに余り興味・感心がなかったことから、私の心のフィルターに留まらなかったのです。

(2) 地域からの期待

国有林の出先機関であるふれあいセンターや森林管理署等には、地域の方々から様々な要望や問い合わせがあります。

一番多いのが植物やキノコの名前についての問い合わせです。先般も、園芸樹の葉っぱや枝をもってきて「これ何と言う木ですか。」とか、時にはキノコを持ち込み、「このキノコ食べられますか。」・・・等々です。

次に多いのが森林環境教育等の実施についての問い合わせや相談です。カミネッコン植樹や森づくりなどのイベント体験等、基本的に日程調整が付けば支援を行うことで対応しています。

このように地方にある国有林の出先機関は、地域(国民)の皆さんからは、森林に関わることから、何でも知っているし、その要望に応じてくれると思っています。これが地域からのニーズですし、熱い期待なのです。

(3) 覚悟

しかし、冒頭で触れたとおり、着任当時は、森林環境教育を担当する者として、草花の名前も解

地域から期待されること

1. 植物やキノコの名前の同定依頼
2. 森林環境教育等の問い合わせ
3. 植樹など森づくりの相談

➡ **熱い期待がある**

森林環境教育中央研修に参加



らず、とても不安な思いでいました。そんな中、東京都高尾の森林技術総合研修所で森林環境教育の研修が開催され、その研修に参加したことが大きな転機となりました。

この研修を通じて、

- ① 森林環境教育の基礎を学べたこと。
- ② 研修内容も実技が中心で、実践に即役立つことができたこと。
- ③ そして何より、全国から集った 34 名の研修生と共に学ぶ中で、研修生から元気と勇気を頂いたことです。それにより森林環境教育の一步を踏み出す覚悟ができたのです。

平成19年度から3年間の実績			
年度	回数	参加人数	実施場所等
平成19年度	7	178	「古の森」4回、「平安林道」、「富里林道」、「相内林道」各1回
平成20年度	12	349	「古の森」9回、「常呂遺跡の森」、「鹿の子沢」、「呼人半島」各1回
平成21年度	12	366	「古の森」7回、「留辺蘂小松沢林道」、「オホーツク展望台」、「平安林道」、「幌岩山」、「サロマ湖畔遊歩道」各1回
計	31	893	「古の森」20回、「平安林道」2回、他の箇所は各1回 ※ 1回平均29名



3 3年間の森林環境教育の実績

上の表は、平成 19 年度から 21 年度までの 3 年間、森林環境教育等の実績一覧表です。ここでイベントの内容の一部を紹介します。

右上の写真は、平成 19 年度の写真です。初任の先生方を対象とした初任者研修と静岡県立農林大学校の県外研修と北見市立上常呂小学校の環境学習の一コマです。この 3 団体は、平成 22 年度まで継続して研修を行っています。

右の写真が平成 20 年度です。北見北斗高校、北見高栄中学校の環境学習と教師 10 年経験者研修です。教員を対象とした研修は、2 日間に亘り行われ、生物多様性や地球温暖化防止などにも触れる内容で行いました。

次の写真が平成 21 年度です。初任者研修、北見青年会議所の実施状況と「子ども環境ウォッチング」の様子です。子どもを対象としたイベントは総勢 75 名で「森林と水」をテーマに留辺蘂の森を案内しました。

この 3 年間で、イベント回数が 31 回、参加人数が 893 名でした。イベント 1 回当たり平均参加人数は 29 名になっています。このように、年々イベントの回数も参加人数も増加傾向にあります。



4 森林環境教育等を取組んだ3年間の教訓

森林環境教育等を取組む中で様々な課題や教訓も見えてきました。

(1) 参加者の無反応にショック！

私は森を案内するとき、参加者に質問し、その反応を見ることがありますが、この日は違っていました、質問された子どもは顔を背けたのです。これは、私が子どもたちの状況や気持ちに考慮せず、一方的に語ったことが原因です。私もショックを受けましたが、本当に辛かったのは子どもたちで、今でも悔いています。

(2) プログラムのマンネリ化

プログラムの内容について、毎回工夫したつもりですが、参加対象者の年齢構成や団体の思いをプログラムに十分反映できたかと云えば、不十分であったということです。

(3) ガイド手法として、言葉による説明・解説が中心

英国の諺に「聞いたことは忘れる、見たことは思い出す、体験したことは分かる、発見したことは身につく。」とありますが、まさしく忘れるか思い出すぐらいのガイドを行っていたことに気がついたのです。

(4) 参加者の感謝・激励の声に励まされて

イベント後のアンケートの中に「北見市が断水で水の大切さを痛感したばかりだったので、『森林（土壌）が水を綺麗にし、貯えてくれる』と説明をいただいたときは、感謝の気持ちでいっぱいになりました」との声がありました。人に褒められたり、感謝されることは、年齢に関係なく、とても嬉しいものですし、元気がでます。

(5) 活動の拠点と森林環境教育を行う場所とが離れており移動時間にロス

オホーツクの森の活動拠点は「森の家」です。その拠点と森林環境教育等を行う場所（主に「古の森」「平安林道」）が離れており、イベント実施に当たっては移動時間を確保しておかなければならないことです。

3年間で見えてきた教訓

- 1, 参加者の無反応にショック！
- 2, プログラムのマンネリ化
- 3, 言葉による解説・説明が中心のガイド
- 4, 激励の声に励まされて
- 5, 拠点と活動の場が離れ 時間にロス

5 3年間の教訓を踏まえた平成22年度の取組状況について

森林環境教育等を取組んできた3年間の課題や教訓を踏まえて、平成22年度の活動目標を定め取組みました。

(1) 森林管理署やボランティア団体と連携したイベントの実施（今年度の重点課題）

- ① 北見事務所管内の森林官等とのフィールド見学・意見交換会の実施です。森林官等19名が参加し、ふれあいセンターの業務内容の説明とフィールド見学、そして森林観察会と意見交換会を行いました。

② 網走中部森林管理署と連携した森林体験教室の実施

サロマ湖畔遊歩道で、佐呂間森林事務所の森林官等が主体に森林体験のイベント企画、運営、調整を行い、当ふれあいセンターがフォローアップする形で実施しました。

教訓を活かし22年度取り組んだこと

- 1, 森林管理署やボランティア団体との連携
(1) 森林官等との意見交換会



「古の森」での森林観察



「森の家」での意見交換会

③ 森林ボランティア「オホーツクの会」へのイベント支援

森林ボランティア「オホーツクの会」については、昨年の研究発表会で森林ボランティアの設立報告を行いました。同団体は、会員約80名を擁し、夏と冬の森林観察会と秋の森づくりのイベントを実施しています。今夏は、津別町民の森で森林観察会が開催され、当センターが支援しました。

(2) ふれあいセンターから情報発信する森林環境教育「子ども探検隊」の実施

これは、子供たちがオホーツクの森を探検し、ターザンロープやブランコなど遊びを通じて、森林や自然に親しみ楽しさを体感してもらうことを目的に森林ボランティア「オホーツクの会」と共催で実施しました。15名の子どもたちの参加がありました。

(3) 気づきや発見を視点に実施した森林観察会

次にガイド手法の工夫です。サロマ湖畔遊歩道で実施した森林観察会で、ガイドから一方的に話をするのではなく、観察会を通じて参加者自らが森林や自然の不思議さに「気づき」や「発見」ができることに重点をおきました。

右の写真は、「ドングリ会議」という絵本を使い、ドングリの豊作、不作について説明しているところです。ドングリは地上に落ちたら直ちに発根し越冬しますが、子どもたちにドングリを拾って発根の状況を確認してもらいました。次に子供たちにコクワの実の試食や枯葉の絨毯の上にゴロ寝し、その感触を楽しみ、葉っぱの付き方を確認してもらいました。

(4) 遊歩道コースのガイドマニュアルの作成

イベントの実施結果も踏まえたガイドマニュアルの作成に着手しました。これは私の後任への森林環境教育等の引き継ぎとガイドを行う際の参考とする目的で作成しています。「古の森」「平安林道」「サロマ湖畔遊歩道」「鹿の子沢遊歩道」等それぞれのコース毎に春・夏・秋及び冬編を作成するべく準備をしています。来年度には完成させる予定です。

(5) 活動拠点と結ぶ「新遊歩道」の作設

次にハードの面ですが、オホーツクの森の活動拠点である「森の家」の裏山に新遊歩道「平安の森遊歩道」が昨年の11月に完成しました。この遊歩道の完成により、「森の家」と一体的な活用ができます。来年度から新遊歩道を森林環境教育等のエリアとして活用を図ることにより、森林環境教育等のバリエーションが広がることとなります。

教訓を活かし22年度取り組んだこと

2. 情報発信する森林環境教育
オホーツクの森子ども探検隊の実施(8/4)



森を探検する子ども探検隊

ターザンロープを体験する隊員

教訓を活かし22年度取り組んだこと

3. 気づきを重点に行う森林ガイド



絵本を使って説明

教訓を活かし22年度取り組んだこと

4. ガイドマニュアルの作成



教訓を活かし22年度取り組んだこと

5. 平安の森遊歩道の作設



6 地域から期待される森林環境教育等を目指して！

これまでの活動を踏まえて、さらに地域（国民）から期待される森林環境教育等を行い得る組織になるためには、特効薬やウルトラCは無いと考えております。次に挙げる項目について着実に実行していくことです。

(1) 個人のガイド等のスキルアップを図る（人間力アップ）

- ① 森林環境教育等に関わる情報収集に努め、向上心を持って業務に取り組むこと。
- ② 創意工夫したプログラムによる実践と反省の反復です。（PLAN・DO・CHECK・ACTIONのサイクル）
- ③ 森林環境教育等の資格取得に挑戦することもスキルアップに繋がります。例えば、森林インストラクター、北海道アウトドアガイド、インタープリター、森林セラピストなどです。
- ④ 北海道森林管理局管内の自然再生指導官を対象とした会議または研修会の開催です。この会議等を開催することにより、自然再生指導官同士の生きた情報交換ができますし、さらにやる気と元気がでます。

このように、個人のスキルアップ（磨く）を図り、絶えず成長し続けることが大事だと思います。結果的に人間力のアップにもつながります。

(2) 組織間の縦、横の壁を乗り越えて、関係機関と連携した森林環境教育等の実施

- ① ふれあいセンター職員と森林管理署職員の情報交換とスキルアップです。特に森林環境教育に携わる森林官等との情報交換はとても大事です。さらに実施内容を吟味しグレードアップを図り、情報交換の機会を作ることです。
- ② 森林管理署と連携した森林環境教育等の実施です。将来的には、市町村や道など様々な団体や組織と連携して森林環境教育等を行うことが重要と考えます。その土台づくりとして、国有林内でのふれあいセンターと森林管理署との連携をさらに広げ密にしていくことです。
- ③ 地域（国民）から要望があっても森林管理署に森林環境教育等を行うスタッフと体制が確立していないと要望に応えることはできません。スタッフの配置と森林環境教育等を行う体制の確立が必要です。

7 おわり

最後になりますが、このように個人と組織がそれぞれ努力を積み重ね質的な変化を遂げることにより、地域（国民）から期待される森林環境教育等も実現可能になりますし、さらに地域（国民）から信頼される組織に結び付いていくと思います。